

こんにちは。静岡県浜松市の川合木工所、川合です。

寒さがやわらぎ、工場のまわりに春の気配を感じるようになってきました。朝の空気は軽くなり、木を削る手は動きやすくなる季節です。

「川合木工所バチ通信」も、5回目になりました。続けられているのは、読んでくださる皆さまのおかげです。

木の表情や工場の空気は、季節とともに少しずつ変わります。同じ作業でも、湿度や気温で木の手触りや音の響き方が変わるのが、ものづくりの面白いところです。

これからも、現場で感じたことや日々の取り組みを、無理のないペースでお届けしていきます。今号も、どうぞよろしくお願いいたします。



## 量産をしながら、個別のご相談も



川合木工所は、工作材や棒材を中心に、同じ寸法・同じ品質のものを安定してつくる仕事をしてきました。

木の硬さや木目を見極め、ばらつきの少ない材料を揃え、同じものをきちんと量産することが、私たちの基本です。長く続けてきた仕事の中で、木の状態を見ながら安定した品質を保つことを大切にしてきました。

太鼓の撥も、基本は同じ考え方でつくっています。ただ、撥については、用途や太鼓の種類、使われ方に応じて、「少し太さを変えたい」「長さを相談したい」といった個別のご相談をいただくことがあります。演奏する方や団体によって、求められる感覚やバランスが少しずつ違うためです。



すべてを一本ずつ作り分けているわけではありませんが、「どんな場面で使われるのか」「どんな音を思い描いているのか」を伺いながら、可能な範囲で調整しています。太鼓の撥は、使う人や太鼓によって感じ方が変わる道具でもあります。

量産の仕事で培ってきた、木の状態を見極めて揃える技術があるからこそ、こうした個別のご相談にも対応できているのだと思います。

撥づくりでも、これまでの仕事で大切にしてきた「安定してつくる」という考え方を土台にしながら、使われ方を意識し、一つ一つ丁寧に仕上げていきたいと考えています。





## 毎日つくっている「バチ」という言葉

私たちは日々、太鼓の撥をつくっています。

当たり前のように「バチ」と呼んでいますが、ふと「この言葉はどこから来たのだろう」と思い、あらためて由来を調べてみました。

ひとつは、太鼓や三味線を打ったときの「バチン」という音から来ているという説。そうした音のイメージから、打楽器を叩く道具を「バチ」と呼ぶようになったとも言われています。

また、漢字の「撥」には「はじく」「打つ」といった意味があり、弦楽器を弾く道具にも使われていた文字だそうです。



毎日つくっているものでも、言葉の由来をたどると、太鼓文化の長い歴史につながっていることを感じます。一本の撥にも、そんな背景があると思うと、ものづくりの面白さをあらためて感じます。



## 社長のひとりごと



熊本城を訪れて

先日、出張で熊本へ行く機会があり、少し時間があつたので熊本城に立ち寄ってみました。

テレビでは見ていましたが、実際に現地で見ると熊本地震の跡がまだ残っていることに驚きました。

崩れた石垣や修復中の場所もあり、復旧にはまだ時間がかかることを実感します。

それでも天守は立派にそびえ、少しずつ元の姿へ戻っていく様子を見ることができました。

観光で訪れている人も多く、熊本城が多くの人に愛されているお城なのだと感じました。

木の仕事も同じで、壊れたものを直しながら長く使い続けていくことが大切です。

熊本城を見ながら、ものづくりの原点を少し思い出した気がします。

また機会があれば、復旧が進んだ熊本城を見に行ってみたいと思います。



日本の文化を守る太鼓の撥メーカー  
**株式会社川合木工所**

〒435-0011 静岡県浜松市中央区国吉町1番地  
TEL:053-421-0139 FAX:053-422-0723

公式 Instagram



太鼓のバチに関する  
ご相談は、お気軽に  
お問合せください。

公式サイト相談フォーム

